

平成 27 年度



片山学園中学校 国内入学試験問題

国 語

- 1 かんとく 監督の先生の指示があるまで、開いてはいけません。
- 2 問題は、4 ページあります。
- 3 「開始」の合図があったら、はじめなさい。
- 4 試験がはじまった後、解答用紙に受験番号を記入しなさい。
- 5 答えは、すべて、解答用紙に記入しなさい。
- 6 しゅうりょう 「終了」の合図で、すぐ筆記用具をおき、解答用紙を裏返しにしなさい。
- 7 問題用紙は持ち帰りなさい。
- 8 その他、監督の先生の指示に従いなさい。

国語 (40分)

〔一〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち日本人と同じような敗戦とその後の経済復興を経験し、私たち以上に歴史的運命による重荷を負って「勤勉」に生きているドイツ人の生活文化の本質は、生活の場としての都市文化を日々築き、人生の中核として「時間」を創り、大切にすることといえよう。この点が、私たちと大きく異なっている。

文化とは人間がカルティヴェイトする（耕し創る）もので、空間としては個性的な都市をつくり、人間個人としては自分自身の豊かな時間をつくることである。そのようにして個性的な「おのれ」を確立し、実現していこうとする。むしろドイツとドイツ人の何もかもがよいと申すつもりはない。しかし、私たち日本人とはかくも異なるドイツ人の生活文化のありようを観察することは、私たち自身の思いがけぬ実相を知るよすがとなり、改めて考える参考ともなり、きっかけとなるのではあるまいか。

〔A〕、生活文化とはいったい何なのだろうか。

人間には二種類の「時間」があると思う。ひとつは外的な社会生活を律し、そこに個人を生かしながら進んでいく時間である。もうひとつは、人間の内的な自分自身の生命の底を流れている時間だ。

（中略）

文化とは、私たちの生き方、すなわち生き、ハタラき、考え、愛し、そして死ぬ、葬儀のしかたとそのときの意識、そういった生の様式の総体である。生の様式、生と死の形式のすべてである。それぞれの地域や民族や国によってこういう生の様式には違いがあり、異質な文化がある。だからこそ世界は多様性に満ちていて面白いのであり、かつまた理解が容易ではない。人間はすべて他者に対しても自分の文化をもってハンダン基準とするからである。伝統文化でもなく前衛文化でもない、死を含めたごく普通の毎日の生活のしかた、これが生活文化である。

この生活文化の理解と伝達は案外に行われにくい。国際的な文化交流でも生活文化の相互理解こそ最重要課題なのだが、これが日本ではなかなか承認されない。文化というと、伝統的なもののしか考えられない。美術や工芸、能や歌舞伎、よくても音楽の演奏会、そう言ったもののしか文化だと思わない。実はそうではないのだ。

〔生活文化〕、この語を積極的に用いたのは実は第二次大戦前の哲学者、若き日にドイツはハイデルベルクで学んだ三木清だった。彼は戦争の始まる一九四一年の秋に、生活文化についてのよくまとまった短い、四百字詰め二十五枚の論文を『婦人公論』に発表している。世を上げて戦争にコロゲ落ちていった時代である。戦争と経済（戦争経済）がすべてに優先していた。そのまったなかで、三木清は「生活文化とは、まず生活への、主体的で積極的な態度である」と説き起こし、「文化への意志」を持つと、と訴えた。創造的に生き、自らの生活を耕していこう。耕すこと、これがカルチャー（文化）の語源、カルティヴェイトすること、である。④自然的に生きるのではなく、毎日毎日の生活を創っていこう。そう訴えた。

当時流行した文化住宅、文化鍋、とくに文化生活とはまったく違う生活文化を彼は考えた。日本的な画一主義は生活文化を貧しいものにする。一人ひとりの個性的な生を耕さなくてはいけない。生活文化とは、生活への愛である。私たちは自らの人生、自分の生活を本当に愛しているだろうか。そしてまた、生活を楽しんでいるだろうか。「楽しむ」「遊ぶ」などというと「ぜいたく」だとされる。ぜいたくではないのだ。愛し、楽しむに足る生活、人生。それを創り出し、築き、育てていくことなしに、何の人間であろうか。人格なしの人間などになんの意味があるうか。

三木清はそうように説いた。厚みと深みとゆとりのある生活文化を創ろう、と語った。太平洋戦争の始まる直前である。そして彼はその直後、⑦非国民として獄につながれ、敗戦後も長く牢に留められて、悲惨な獄死をとげた。生活文化や余暇を口にするだけで、非国民とされたのである。何と日本的なことだろう。そして彼の悲運は、本質的には今の日本でもまだすっかり克服されたとは言い難いのであるまいか。

今の私たち日本人が、毎日毎日の生を、三木清が語ったように真に「愛している」だろうか。「明朗で、健康で、また能率的な生活は美しい」と彼は記した。いま、私たちの生活文化は本当に美しいだろうか。厚みと深みとがあるだろうか。

月々の現金収入だけから言えば、今の私たちの生活はヨーロッパ各国の人々と並び、あるいはそれ以上に豊かだ。それはたしかだ。〔B〕生活文化の厚みは残念ながら、ない。これから私たちはそれを創っていかなくてはならない。次の世代に、厚みのある豊かな生活文化を、創造的個性が生きられる社会を贈り、個人の内面をヤシナイ育てる「豊かな時」を創り、伝えていかなくてはならない。三木清や彼の世代の人たちが願って果たせなかった課題を実現していかなくてはならぬし、それがさいわいにもできる現代なのだ。

「われわれは知力と英知を傾けて、人生を愛し、生活文化の厚みをつくっていこうではないか」と三木清はしめくくっている。それから五十年がたった。日本と日本人は、いまようやく「厚みのある生活文化」ということを広い層にわたって真剣に考えるようになった。⑧五十年前の先人たちが願って果たせなかった課題を実現して次の世代に渡していかなくてはならないし、それが多分できる現代である。もし、いましなかったら、日本には永久に生活文化の豊かさはやって来ないのではなからうか。

（小塩節「ドイツの都市と生活文化」より。一部表記を改めたところがある）

注 前衛……時代の先がけとなって活動するもの。

(1) 〰〰線アゝオのカタカナの部分に漢字に直しなさい。

(2) 線①「『時間』」とありますが、筆者の考える、人間のもつ「時間」を二つ、文章から抜き出しなさい。

(3) A、B にあてはまる言葉を次のアゝオから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そして イ しかし ウ また エ だから オ さて

(4) 線②「実はそうではないのだ」とありますが、どういうことですか。文章中の言葉を使って、説明した次の文の□を埋めなさい。ただし、必ず「伝統的」「様式」という言葉を使うこと。

文化とは、□ということ。

(5) 線③「生活文化」とありますが、どういうものですか。説明している部分を文章中から十九字で抜き出しなさい。

(6) 線④「自然的」とありますが、この文章の中でこの言葉と反対の意味で使われている言葉を文章中から三字で抜き出しなさい。

(7) 線⑤「画一主義」とありますが、どういう意味ですか。説明として最も適切なものを次のアゝエから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それぞれの事情や個性を考えず、物事すべてを同じようなものにそろえる考え方。
- イ 天皇が定めたおきてをただ一つ絶対のものとして、国民に従わせる考え方。
- ウ 生産の手段や財産を個人のものとせず、社会全体で平等に分かち合う考え方。
- エ それぞれの個性を大切にしながら、一つの目的に向かって協力し合う考え方。

(8) 線⑥「ぜいたくではないのだ」とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。文章中の言葉を使って五十文字以内で答えなさい。

(9) 線⑦「非国民」のように、「非〇〇」という熟語になるものを次のアゝエから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 効果 イ 完成 ウ 可能 エ 常識

(10) 線⑧「五十年前の先人たち」と同じ意味の言葉を文章中から十二字で抜き出しなさい。

- (11) この文章の内容に合わないものを次のアゝオから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 生活文化の理解と伝達は、国際的な文化交流で大きな役割を果たすと言える。
- イ 三木清は第一次大戦前、ドイツのハイデルベルクに留学し、西洋の思想を学んだ。
- ウ 厚みのある生活文化を創り上げるには、生活への愛を持ち、豊かな時間を過ごす必要がある。
- エ 三木清は、厚みとゆとりのある生活文化を世の中にすすめたため、牢に入れられた。
- オ 今私たちは、豊かで個性的な生き方を尊重する社会を創っていかなくてはならない。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

妻の里子に先立たれた「彼」は、定年退職後、長男夫婦と同居する自宅の居間に暖炉をこしらえる。工事が完了した晩、庭でしばらく煙の香を楽しんだのち「彼」が居間にもどると、長男夫婦はすでに二階の寝室へひきあげており、暖炉のそばには誰もいなかった。

独りで新しい薪をくべ足し、それがA^{注1}とはせるのを聞いていると、死んだ妻の里子の顔が目に見えんできた。仕様のない人、とてもいたげに、目をBさせながら笑っている。

ちよつと見ただけでは、右目が義眼だとはわからない。

「よかったですね、あなた、ご自分だけの楽しみが出来て。でも、わたしだって、火は好きよ。だから、これから、わたしもあなたと一緒に暖炉の火を眺めるのを楽しみにするわ。だって、わたしたち、たきびが縁で結ばれた仲でしたものね。」

妻が耳許でそう囁くのがこえた。

ちがいない。もし、あの日が雨降りで、たきびができなかったとしたら、自分と妻はお互いに別の道を生きることになったかもしれない——彼は暖炉の炎に見入ったまま、そう思った。

あの日、というのは、ずっと以前、十年がひと昔なら、それを四つ半も重ねた昔のことだ。そのころ、彼は中学三年生、里子はまだ小学校六年生で、町の暖簾の古い染直という屋号の染物屋の次女であった。

彼の生家の文房具屋もおなじ町内にあって、二人は幼いころから顔見知りであり、町内の子供会の会員同士にすぎなかったのだが、その年の晩秋のある日曜日の朝、子供会の恒例で町内の小公園を清掃したのち、掃き集めた落葉でたきびをした際、彼が、いつもの銀杏の木のほかに、ポケットに忍ばせていった幾粒かの生栗をそと火のなかへ投げ入れたことが、二人を思わぬ仲に引きずり込むきっかけになったのであった。

あの朝にかぎって、どうしてそんなことをする気になったのか。全く魔がさしたときかと思えないが、ただ年下の子らを驚かしてやろうといういたずら心だけで、他にたくらみなどあろうはずがなかった。ところが、銀杏の実が音をたてはぜ始め、たきびをカコンでいる子らが笑いさざめいているうちに、ぼんと、ひときわ高い破裂音がして、それと同時に、彼の隣にしゃがんでいた里子が、きゅんと悲鳴を上げてあおむけに倒れたのである。

彼は、笑った。ぼんという破裂音は、生栗がやけはぜた音にちがいなかったが、それしきの音で、六年生の女の子が、まるで胸を強く突かれたようにひっくり返るはずがない。彼は、里子がみんなを笑わせようとして派手に倒れてみせたのだと思ったのである。けれども、彼の見当は外れていた。

里子は、倒れたまま右目を手のひらでおおって、痛いよう、痛いよう、と泣き出した。彼は驚いて抱き起こした。すると、右目をおおっている手のひらの、指の股から、一筋の鮮血が手の甲を走るように流れた。

彼は、最初、里子になにが起こったのかわからなかったが、そばにいた男の子のひとりが、あ、栗だ、と叫ぶのを聞いて、一瞬のうちにすべてを理解した。まさかと思ったが、起こりえないことではなかった。出血しているから、ただハゲしく当たっただけではなくて、目のどこかを傷つけたのだ。

目玉ではないように。とっさに彼は祈るように思った。

「ど、どれ、見てあげる。手をどけて。」

彼は、目をおおっている里子の手を引きはがそうとしたが、力が及ばなかった。里子は、痛みがますますひどくなるのか、泣きながら「C」とふるえたり、身もだえたりする。仕方なく、彼は染直の店まで里子を両腕で横たえるように抱いていった。

染直では、店にいた家族や使用人たちが総立ちになった。土間の奥から走り出てきた母親が、彼の腕から里子を引いたくように抱き取った。染直の人々は、みな、うろたえていて、彼がそこに立っていることなど忘れていた。彼は、誰へともなくお辞儀して店を出た。

里子の右目は思いのほかの重症で、失明のおそれがあるといううわさであった。たきびに生栗を入れたのは誰かが問題になっていると聞いたが、彼はおそろしくて名乗り出ることができなかった。まことに薄気味の悪いことだったが、なんのおとがめもないままに彼は知らぬふうを装っていた。

うわさどおりに、里子の右目が治療のいかにもなく失明したのは、中学二年の夏であった。義眼になったが、彼女の表情の豊かさがまるで違和感を感じさせなかった。以前の明るさも活発さも、すこしも失われた気配がなかった。中学校は難なくソツギョウし、土地の女子高校にもよい成績で入学した。彼が東京の大学に進学し、夏の休暇で帰省したとき、道で出会った里子は、彼にはまぶしくてたまらない笑顔で、お帰りなさい、と挨拶してくれた。

その休暇の間に、彼がかつての罪を里子に告白する気になったのは、もはや自責の念が自分の力では支え切れぬほど心に重くなっていたせいでもあるが、里子の何事もなかったようなけなげさに、強く心を打たれたからでもあった。

休暇も残りすくなくなったある日の夕方、彼は心苦しい思い出のある小公園まで里子にきてもらって、この落葉をたいたとき生栗を入れた犯人は自分だと告白し、里子の望むどんなつぐないでもするつもりだといった。すると、里子は思いがけなく、

「ありがとう。うれしいわ。あたしね、あなたがいつかはきっとこうして打ち明けてくれると思って、心待ちにしていたの。」と笑っていた。

「……というと？」

「あたし、あのたきびに生栗を入れたのがあなただってことを知ってたの。あなたがそっと投げ込むのを見ちゃったから。」

彼はひどく驚いた。

「でも、あたしはそれを誰にもいわなかったわ。」と、里子はつづけた。「家では、誰のしわざなのかって、ずいぶんさわいだけど、あたしが頼んで栗を入れた人をさがすのをやめてもらったの。あたしは運が悪かっただけなのに、誰もが栗を入れた人の罪にする。それがいやだったから。あなたを罪人にしたくなかったから。」

⑧彼は、思わず里子の手を取った。

(三浦哲郎「たきび」より。一部表記を改めたところがある)

注1 はぜる……(草木の実が) 勢いよく破裂すること。

注2 さざめく……にぎやかに声を立ててさわぐ。

注3 自責の念……自分で自分のあやまちを責める気持ち。

(1) 〰〰線ア〰オのカタカナの部分の漢字に直しなさい。

(2) A、B、C にあてはまる言葉を次のア〰カから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア わなわな イ そわそわ ウ ぐるぐる エ めめめめ オ しょぼしょぼ カ ぱちぱち

(3) 線①「二人を思わぬ仲に引きずり込む」とありますが、「彼」と里子はどのような関係になったのですか。漢字二字で答えなさい。

(4) 線②「魔がさした」とありますが、「魔がさす」の意味として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
ア 悪意を人に向ける イ きまぐれな行動に出る ウ ふと悪い気を起こす エ 突然のことに反応する

(5) 線③「きゃっと悲鳴を上げてあおむけに倒れたのである」とありますが、この里子の行動を「彼」はどのようなものだと考えましたか。「彼」の考えが書かれている最も適切な一文を文章中から抜き出し、最初と最後の三字を書きなさい。(句読点も一字に含みます)

(6) 線④「ように」と同じはたらきをする「ように」を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア あの選手のように、強くなりたい。
イ 楽しめるように工夫しよう。
ウ はやく用意をするように命じる。
エ 氷のように冷たい手をしている。

(7) 線⑤「彼は知らぬふうを装っていた」とありますが、このときの「彼」の気持ちにあてはまるものとして最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分のせいで里子が失明するかもしれないと知り、深い悲しみとさびしさを感じている。
イ 周囲の人が生栗を投げた犯人を本当は知っているのではないかと心配に思っている。
ウ 思いがけず事態が大きくなり、本当のことを話す勇氣は持てないが、罪の意識を感じている。
エ 自分が里子にしてしまったことを忘れることができず、早く謝りたいと思っている。

(8) 線⑥「里子の何事もなかったようになげさ」とありますが、それが具体的に書かれている部分を文章中から抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。(句読点も一字に含みます)

(9) 線⑦「心苦しい思い出」とありますが、どのようなことですか。文章中の言葉を使って答えなさい。

(10) 線⑧「彼は、思わず里子の手を取った」とありますが、なぜ「彼」はそうしたのですか。それを説明した次の文のⅢにあてはまる言葉を考えて書きなさい。ただし、全ての□に『彼』という言葉を入れること。

里子が、□Ⅰ□と知りながら、□Ⅱ□ことをせず、また、周りの人からも□Ⅲ□ことに心を打たれたから。

国語
解答用紙

受験
番号

得点

[illegible][illegible]